

現代日本語におけるドイツ語系外来語の概要

田 中 宏 幸

0 まえがき

0. 1 日本語に対する外国語の影響の概況

他国語の影響を全く受けない言語は稀であろう。日本語も、古来、異文化の摂取と共に、種々の外国語の影響を受けてきた。文献時代以前のことは通常考慮しない。最初の大きな影響は中国から仏教文化の関連と共にもたらされる。8世紀頃から16世紀頃まで繰返し、中国から文化と共にその言語の影響が及んだ。語彙ばかりか、文字や、音韻も借用され、さらに平仮名、片仮名が形成され、また和字や和製語とでも称すべき多数の語も形成され、今日では国語に完全に同化、統合されるに至っている。16世紀以後はまずキリシタン文化との関連でポルトガル語から借用され、以後ヨーロッパ系文化と言語の影響を受けることとなる。17・18世紀は、通商と、いわゆる蘭学の関係でオランダ語系の語が借用される。やがて周知のごとく、明治以後、ヨーロッパ文化は、堰を切ったようにその影響を及ぼすことになった。以来、戦時中のような時代を除いて、新語の必要があるにせよ、独特の効果やニュアンスを求めるにせよ、また日本語の構造が借用に適しているにせよ、多数の外来語が摂取され、また好んで用いられてきた。特に最近は、この傾向はますます強く、明治時代のような漢語による訳語形成も少なくなり、カタカナの外来語が語彙単位としても、また使用頻度の点でもますます増加しているようである。

明治以後のヨーロッパ系外来語のなかで、ずばぬけて多いのは、英語系外来語であり、これは、戦後はますます増加している。最近の新しい、あるいは多用される外来語もほとんどが英語系である。しかし、これに次いで多いのは、ドイツ語とフランス語であると思われる。後でみるように、英語の割合は8～9割に達するので、これに比較すればその数は全体としてみると僅かなものにすぎないかもしれない。しかし、かつてはドイツ文化の影響は分野によってはかなりの重要性をもつものであった。ただ今日では、例えば医学をみても分かるように、それはかつての意味を最早もっていないのではないと思われる。総合雑誌などで以前好まれていたドイツ語系の外来語も最近はなくなったともいわれる。⁽¹⁾ 確かにそうかもしれない。今日ドイツ語を学ぶ人口は、著しく増加し、また多数のドイツ人が来日し多数の日本人がドイツへでかけるにもかかわらず。もっとも、英米語の場合はそれはもっと多いのかもしれない。ドイツ語系外来語の後退と英語系外来語のますますの

(1) 文化庁編・外来語8ページ

増加傾向は現代日本語の外来語情況の特色のひとつであろう。しかし、いくらかのドイツ語系の語は現代日本語にとって不可欠の語となっていることも確かである。例えばアルバイト、アレルギー、ゼミナールにテーマ、そしてエネルギーなどは今日半ば流行語の感さえある。ワッペン、メルヘン、それにベルーフという雑誌もあるらしい。⁽²⁾現代日本語のなかで、やはり、ドイツ語系の外来語はなお確実に使用されているという印象を受ける。しかし、これらのドイツ語系外来語についてのまとまった報告はこれまでのところ見られないようである。そこで以下ドイツ語系外来語について、その数量、分野、借用年代、具体的な語のリストなどを示し、さらに最近の傾向について新しい借用や頻度の高い語など、その概要を報告したいと思う。

0. 2 用語の定義・問題点・資料などについて

国語学では、「現代」は明治以後をさすこともあるが、⁽³⁾ここでは、特に1945年以後の時期を指すことにする。もちろん、語彙体系は、史的集積でもあり、必要に応じて戦前、或いはそれ以前の時代にも言及することになろう。また、日本語の外国語からの借用にみられるように、地理的に離れた言語からの借用は、一般に先ず各種の専門分野、職業分野のごく一部の人々によって行われ、やがて、必要に応じて一般の語彙に取入れられていくことになる。多数の借用は、専門語に留まり、一般にもたらされない。ここでは、しかし、このような専門語、特殊語は取扱わない。一般の語彙に取入れられた語を対象としたい。この一般の語彙という概念も、必ずしも明確ではないが、一応、現代の一般の人々が、新聞・雑誌や一般の図書で読んだり、放送・講演などで耳にしたり、日常会話で用いられるような用語の総体を想定している。もちろん、個人の使用語彙、理解語彙は、量的にも、実質のうえでも異なり、明確に規定できるものではない。便宜的には、一般の辞書に収録されているか、される可能性のある語彙ということになろうかと思う。それは通常、共通語と称されているものに当る。

日本語の語彙は、その由来によって、普通、日本語固有の「和語」、中国から借用同化した「漢語」、その他の借用語「外来語」に分けられる。これに、これらの混合形「混種語」が加わる。外来語とは、定義によれば「他の言語体系の資料を自国語体系に借り入れて、その使用が社会的に承認されたもの」⁽⁴⁾であるから、元来漢語も含まれることになるが、その日本語への同化の程度が高く、これに含めない習慣である。従って、「外来語」とは、主に16世紀以後のヨーロッパ系言語からの借用語をさす。なお、定義の「資料を借り入れる」というのは、外国語の語形を大体そのまま借用することを意味する。「大体」というのは、

(2) 最近ドイツの住居情報誌 *Schöner Wohnen* の日本語版「シェーナールボーネン」も刊行された。なお本稿では以下ネーミングについては触れないが、商品名や店名などでいくらかのドイツ語が用いられている。アウスレーゼ、ザーネ、ザルツ、ユンケルなどの商品名がある。

(3) 例えば石綿・現代347ページ；国語学辞典「国語史」の項参照

(4) 国語学辞典「外来語」の項

多くはそのまま借用されることはなく、音声的同化が行われるからである。この音声的同化は、これ自体表記などとも関連して種々問題があるが、これについては他の文献でかなり論じられているし、私も音声干渉に関連して報告したことがあるので、ここでは特別には取扱わない。⁽⁵⁾また、文法的同化、意味体系への統合などについても個々の例で必要に応じて触れるにとどめる。

ところで、外国語の影響は外来語の借用に限らない。しばしば、意味だけが借用されたり、自由な、或いは外国語の造語形式にならった自国語資料による再現もかなり認められる。一般に翻訳借用、形式借用などよばれ、日本語でも明治時代には、かなり好まれた。さらに、シンタックスや文体が借用されることもある。以下においては、このような意味や形式の借用については原則として触れないこととする。⁽⁶⁾

さらに、定義によれば「使用が社会的に承認され」ることが外来語の条件であるが、これは、例えば、カタカナで書かれていても一般的でないような、一時的な使用、ないし、引用は含まないということであろう。しかし、この明確な区分は、しばしば困難である。特に、新しい借用や、頻度の低い専門語と一般語の境界にあるような語では区分は多分に流動的である。この点で、小型の辞書類に収録されている語彙は、一般語彙の中核部分と解することができる。

「外来語」はさらに原語によって分類されるが、ドイツ語系とは、ドイツ語から直接借用されたことを意味する。それは、ギリシア・ラテン語や、フランス語からドイツ語に入った語ももちろん含む。そういう点では、一般に辞書などでラテン語系とされる語のなかにも、ドイツ語（または英語）を通じて借用された語もあると思われる。また音楽用語のイタリア語系とされる外来語も直接借用されたのではなく、かなりの語がドイツ語（或は英語）を経由して借用されたと思われるが、これらについては、一応、除外した。またドイツ語から英語にはいり日本語にもたらされた語もいくらかある。これは、原則としては英語系ということになる。この場合、直接ドイツ語からも借用され、英語から、さらに補強されるということもあつたであろう。⁽⁷⁾

原語という点で、注目されるのは、ヨーロッパの言語は、相互に系統的に近く、しばしば、同一語源（多くは古典語系）の語を有し、これらが、同時に、或いは、相前後して、

- (5) 例えば榎垣 96 ページ以下参照。ドイツ語に関しては拙論「日独対照音韻論」金沢大学教養部論集・人文科学編 20 号所収
- (6) 石綿・現代 361 ページ以下；榎垣 188 ページ以下；翻訳借用などの分類については Betz が詳しい。他に柳父章・翻訳語の論理・東京（1980）；同・翻訳語成立事情（岩波新書）；森岡健二・訳語の成立するまで（言語生活 291 号所収）などの文献が便利である。
- (7) ハンバーガーは英語経由の代表例であろう。シャンツェ、スピッツ、グックスフント、ディーゼルなどは両語からの借用の可能性がある。ついでながらツァイトガイスト、ライトモーター、リートなどの語は英語にも取入れられている。なおドイツ語は他方古いオランダ語系の借用語オブラート、ギプス、ドクトル、ヒステリーなどを補強した可能性が強い。

また時には、かなりの時を隔てて日本語に取り入れられることがある。その場合、意味・語形が一致すると、原語は明確でなくなる。少なくとも、相互に借用を補強しあつたことになろう。こういう場合は原語多元説が必要となろう。⁽⁸⁾また、同一の事物が英・独・仏語などからそれぞれ異つた語として借用されることもある。これは、同義語ということになる。原語のこのような複雑な関連は、また現代日本語の外来語借用のひとつの特色であり、その研究調査は日本の外来文化・言語の受容史の興味ある注釈となるであろう。しかし、ここでは、この問題に立ちいることは適当ではない。以下ドイツ語系という判断は、まず資料のひとつとした「岩波国語辞典」の記載により、異同については、「広辞苑」、東京堂と角川書店の「外来語辞典」などを参照した。

資料としては、以上の辞典以外に小型辞典として「三省堂国語辞典」、最近の傾向については、まず、いくぶん整理された「現代用語の基礎知識」1984年版及び1985年版、それに「朝日新聞」、「朝日ジャーナル」、「へるめす」など、さらにその他一般書を用いた。なお二次的文献にもかなり依存したことを予めお断りしておく。文献については124ページ以下を参照されたい。

1 外来語・ドイツ語系外来語の数量

1.1 外来語の数量

明治以後のいわゆる現代日本語は、ヨーロッパ系言語の大きな影響を受けるが、確かに「外来語は全く現代語の特徴をなすもの」⁽⁹⁾といえるであろう。そして、その数量は「きわめて多い」⁽¹⁰⁾とも言われている。もちろん、「漢語」を含めれば、おそらく日本語の語彙の過半数が外来語ということになるであろう。しかし、これを除けば全体に占める割合は、それほど多くはない。とはいっても、すべての専門語彙を考慮するなら相当の数になるであろう。そして、一般語でもかなりの数になると思われる。ひとつのデータとして「外来語辞典・角川」があげられよう。この辞典に収録された語は「すべてわが国のなにかの文献、あるいはそれに類するもの（広告や放送など）にあらわれたものに限られ、……しかもそれらは大衆性のあるもの、オーソリティのもの……すなわち、経典・法令・テキストブック・通俗専門書・教養書・文芸書・新聞・雑誌・現今通用の辞書・百科辞典など」⁽¹¹⁾から採取されたもので、総計数万語のなかから25,000余語が収録されている。再版で更に約2,200語が追加され、合計27,000余語を取めている。このなかには、いくらか重要な固有名詞も含まれている。一方「外来語辞典・東京堂」は語数が明示されていないが、約18,

(8) 「外来語辞典・角川」7ページ。例えばガス、カテゴリー、フォルム、プロパン、メロディー、モチーフ、モラルなどかなりある。

(9) 石綿・現代368ページ

(10) 樺垣14ページ

(11) 「外来語辞典・角川」6ページ

000 語が収録されていると思われる。また特に現代の語彙傾向に重点をおいている「現代用語の基礎知識・84年版」は、各種専門語領域の用語と巻末の外来語一覧との合計で約 20,000 語を収録している。このあたりが一般の外来語数の上限であろう。というのは、これらの辞書類には、必ずしも一般の語彙とはいえない専門語彙に近い語もかなり入っているからである。このような語は、一般の言語辞書では収録されていない。専門語では、もちろんこれ以外の多数の外来語ないし外国語が用いられていることはいうまでもない。

では、普通の辞書類ではどの程度の外来語が収録されているのであろうか。最も簡単な記述によると 66,000 語収録する或る現代語辞典で 5% という数があげられている。⁽¹²⁾ さらに 1956 年刊行の「例解国語辞典」では、40,393 語中 1,428 語 (3.5%)、また 1963 年刊行の「岩波国語辞典」では、57,000 語中 2,918 語 (5.1%) というデータがあげられている。⁽¹³⁾ 私が後者の 1979 年 3 版で調査したところでは、58,600 語中 3,172 語 (5.4%) であった。因に 1889 年の「言海」では、39,103 語中 551 語 (1.4%) であったというから、これから、同時に数十年間に外来語が著しく増加したことが或る程度推定できよう。しかし、この約 5% という数はそれほど多いとはいえないのではないかと思う。数百語の本来語の他は外来語というアルバニア語は極端な例かもしれないが、⁽¹⁴⁾ 英語の語彙もまた多数の外来要素から成立していることは周知の通り、ドイツ語は比較的外来語の少ない言語とされるが、⁽¹⁵⁾ それでも Duden: Fremdwörterbuch 第 4 版は実に 48,000 語を収録している。これは比較的しばしば一般人にもたらされる語を収録したものである。なお、同化された借用語 *Lehnwort* は含まれていない。もっとも専門語が一般によりしばしば且つ多数もたらされる現代の状況を考慮してかなりの専門語が含まれているらしいが。ドイツ語の一般の辞書の比較に適したデータはないが、ある現代の辞書の A の部について、約 17% という数があげられている。⁽¹⁶⁾

なお、もっと収録語数の多い広辞苑クラスの辞典では、どのような割合を示すのか興味のあるところであるが、固有名詞を多数含むので、この調査は残念ながら、手軽にはできない。それに、辞書類に収録されるか、否かは、その編者の観点にかなり左右される。同じ小型辞典でも、例えばドイツ語系に関するかぎり「岩波国語辞典」と「三省堂国語辞典」では収録語にかなりの相違が認められる。ひとつには、外来語のなかには、新旧の交代が激しいものもあり、また専門語か一般語かの判断も容易でないという事情が加わる。従って、一般的に完全に一致した収録状態は期待できない。

1. 2 原語別数量・割合

(12) 市河-服部 204 ページ

(13) 矢崎 9 ページ、「言海」のデータも同書による。

(14) Bloomfield, p. 467, 三宅他訳, 624 ページ

(15) Sapir, p. 195, 泉井訳 198 ページ以下など参照

(16) Agricola, S. 522

これらの外来語のなかで、英語系が最も多く 90%と推定する研究者もある。⁽¹⁷⁾ということになると、これ以外の系統の語の割合は、はなはだ少ないわけである。

「岩波国語辞典」3版で調査したところでは、大体次のような結果がみられた。外来語以外に、混種語の一部も数えたが、それは、そこに含まれる外来要素が独立の見出語として収録されていない場合算入した。また省略語も、完全形がある場合は、数えなかったが、これのみが収録されている場合はいれてある。同様、系統が同じ語の表記上の別形は除外した。以下の()内の数は、混種語をいれた場合の数である。

	語 数	割 合
英 語 系	2619 (2673)	82.5% (81.9%)
ド イ ツ 語 系	183 (202)	5.8% (6.2%)
フ ラ ン ス 語 系	164 (171)	5.2% (5.2%)
其 の 他	206 (219)	6.5% (6.7%)
合 計	3172 (3265)	100%

つまり、英語系は 90%ではないが、8割(全体の 4.6%弱)は超えていることが分かる。これに次いでドイツ語系が約 6%、これは全語数に対しては 0.34%強にすぎない。フランス語系は 5.2%、全体の 0.29%でほぼドイツ語系と同じ位になっている。その他で最も多いのはアルカリ、インキ、カラン、ランドセルなどの 60 語のオランダ語系、アリア、アレグロ、スパゲッティなどの 50 余語のイタリア語系、あと、ポルトガル語系が 35、ロシア語系 23、エスト、パトス、ウイルス、ポリオ、ミサなど 25 の古典語系の外来語などである。ともかく、原語別の大体の割合は明らかになったと思う。

「広辞苑」ではこの割合の調査はできなかったが、ドイツ語系外来語は、「岩波国語辞典」の 2 倍以上の少なくとも 517 語が確認された。全語数約 20 万語の 0.258%に相当する。これとほぼ同じ数のドイツ語圏の各種固有名詞が収録されている。両者合せば、約 0.5%と推定できる。なお、これ以外にドイツ語系の翻訳借用と明示された見出語がざっとみただけで百数十語確認されたことを付記する。この一部は、外来語と併存している。

1. 3 実際のテキストにおける外来語の数量

以上は、現在利用されているひとつの代表的な小型辞典のデータであるが、実際のテキスト、すなわち一般の用語のなかで、外来語はどのくらい使用されているのであろうか。

これについて、しばしば引用されるのは、国立国語研究所の 1956 年の雑誌についての調査と、1966 年の新聞用語の調査データである。いずれも、やや年月を経過しているがなお、

(17) 榎垣 21 ページ

大いに参考となる。まず、前者を引用する。

	異なり語数	延べ語数
和語	36.7%	53.9%
漢語	47.5%	41.3%
外来語	9.8%	2.9%
混種語	6.0%	1.9%

(石綿・現代, 348 より引用)

つまり、外来語は漢語を除けば、使用語数の異なり語数で10%弱、延べ語数で3%弱ということになる。これを、先の辞典の収録語数の割合と比較すると、かなり多くの外来語が使用されていることが分かる。しかし、延べ語数の割合でみるなら、意外に少ないともいえる。また、外来語は、和語・漢語にくらべて1語の平均使用頻度は低いということも分かる。これは、しかし、外来語や専門語の色彩の強い語では一般にみられる傾向であろう。

この調査には、さらに雑誌の種類に応じて分類したデータも示されている。それによると、分野によるその異なり語数の割合には相違があり、最も低いのは文芸雑誌類の5%、逆に最も多いのは婦人雑誌などの9.9%、これに次いで趣味・娯楽雑誌の8.3%、実用通俗科学雑誌の7%、庶民雑誌の5.7%となっている。⁽¹⁸⁾確かに、モード関係や一部の芸能部門、一部の専門分野の用語などでカタカナ語——そのすべてが外来語ではないが——が目立つ。スポーツの分野でも、例えばゴルフのように種類によっては外来語が多い。

なお、この数をもて、全体の割合が9.8%にしては、各分野の割合が低いようであるが、これは、外来語が特に分野によりそれぞれ異なっていることによるものである。

この10年後の新聞語の調査結果からは次のようなデータが得られる。すなわち「新聞の語彙」(18ページ)のデータで推定すると、異なり語数に関して

和語	38.8%
漢語	44.4%
外来語	12.0%
混種語	4.8%

という割合となる。これにより、雑誌と新聞との相違はあるが、外来語の割合が10年間で増加したのではないかと推定できる。なぜなら、新聞用語の方が、特に雑誌用語より外来

⁽¹⁸⁾ 石綿・現代 351ページより引用

語を多用することは考えられず、むしろ各種の雑誌の方が夫々の専門語を示すように思われるから。なお、新聞用語でも、記事の分野や欄による相違があるが、そのデータは示されていないようである。なお、述べ語数についての割合は、ここに示されたデータでは必ずしも明らかではないが、外来語については、凡そ4%と推定される。ここでも外来語の平均出現頻度は、和語・漢語より低い。

次に、このなかにドイツ語系の語がどのくらい含まれているかを、26ページ以下の「度数順外来語表」と128ページ以下の「五十音順索引」により調査してみた。

外来語は異なり語数で約4,600語とされるが、ドイツ語系は、固有名詞や、表記上の重複形、それに系統の疑わしい語など除くと52語、すべてをカウントすると70語であった。その割合は、全外来語の1.13~1.52%にすぎない。一方外来語の延べ語数約22,000に対し、ドイツ語系は約360語で、その1.6%となり非常に少ない。1語あたりの出現頻度は約5回で、これは外来語全体の4.78回に近い。しかし、これは平均であるから極端に頻度の高い語があれば、他の頻度は低くなる。例えばアルバイトとバイトの2語で95回という数がみられる。これに次いでテーマ(34)、ビタミン(30)、ポリエステル(22)、カプセル(15)、カルテル(12)、プロレタリア(11)、エネルギー(10)、アクリル(8)、ホルモン(8)、ゼミナール、ゼミ(8)、イデオロギー(7)、ビールス(7)、ディーゼル(5)、ワクチン(4)、カロリー(4)、アイスバーン(3)、ウラン(3)、エネルギー(3)などの順となっている。これ以外の語は一語あたり1-2回である。アレルギー、アレルギー、カルテ、コークス、ザイル、シュプール、シュプレヒコール、ストック、セレナーデ、チタン、テノール、ナチ、ノイローゼ、ヒュッテ、フェーン、ポリウレタン、ポリエチレン、ボンベ、メタノール、メチル、ヨーグルト、ヨーデル、リチウム、レントゲン、ワーゲンなどである。⁽¹⁹⁾

従って辞典のなかで5~6%占めるドイツ語系外来語も実際のテキスト——ここでは新聞であるが——では使用される割合は一般の外来語に比較して、さらに低いことが分かる。この一般の外来語とは、大半が英語系の語であろう。もちろん、それは全体としてのことであり、分野によって相違があろうし、また英語系でも出現頻度の低い語も少なくないし、一方アルバイトやテーマ、ビタミンのような頻度の高いドイツ語系もある。因に、これらの語の外来語の出現数の順位は、夫々49, 97, 174となっている。最近頻度の高いエネルギーは当時は418位となっている。

2 ドイツ語系外来語の分野と借用年代

英語系の外来語はその数量が多いばかりではなく、その分野も、ほとんどあらゆる分野

(19) さらにブランクトン(1)、プロパン(2)、～ガス(9) [()内の数は出現数]などのドイツ語系と推定される語も含まれているが、これらは岩波、三省堂の2国語辞典に従って一応英語系として除外した。

に及んでいるようである。しかし原語によっては、外来語は、しばしば文化借用の関連で、ある時代と、ある分野で集中的に借用される。例えば、ドイツ語系の借用は、医学、哲学用語、フランス語は芸術、服飾、料理、イタリー語は音楽といった分野上の特色がみられるようである。以下ドイツ語系外来語の借用の時期と分野についての概要を紹介する。

2. 1 ドイツ文化・言語との接触の沿革

まず、二三の文献によりドイツの文化と言語の受容の沿革をみておきたい。⁽²⁰⁾

ドイツ文化との最初の接触は、確かに1596年のトーマス・フォン・ケンペン（ア・ケンピス）Thomas von Kempen（1379/80—1471）のDe imitatione Christiの訳「コンテムツス・ムンチ」の刊行まで遡ることができるかもしれない。それは「日独文化交流史にとって、もっともモヌメンタルのものに価する」⁽²¹⁾ともいわれている。しかし、これはラテン語からの翻訳であり、一応例外的なものとされよう。従って、これを例外とすれば、ドイツ文化の最初の注目すべき影響は、17・18世紀のいわゆる蘭学、つまりオランダ語を通じてもたらされた。有名な「解体新書」（1774）の底本となった蘭本の原書は1725年刊行のドイツ人クルムス Kulmus の著という。⁽²²⁾医学の他に、地理学などの影響も知られている。これに関連してオランダ人として来日したドイツ人医師、ケンペル Kaempfer（1690年来日）とシーボルト Siebold（1823年来日）の直接的な影響が注目される。影響を受けた日本人としては宇田川榕庵の名があげられよう。彼はシーボルトから贈られた Sprengel の植物学書を読むために1826年にドイツ語を学びはじめ、後にこの原著による植物学書を著したということである。⁽²³⁾

このような揺籃時代を別にすれば、ドイツの言語・文化が本格的な影響を及ぼすのは1860年以後のことである。この年プロイセン使節が来日、ドイツ語も公式に学習されることになる。翌1861年には「修好通商条約」が締結、2年後の1862年蛮書調所には5人の日本人のドイツ語教員がいたという。やがて1868年明治新政府が成立、翌1869年には、1866/70年成立の北ドイツ連邦と「修好通商航海条約」が締結され、この2年後にはドイツ帝国が統一され、にわかにその影響が活発となる。この年の年末岩倉使節団が欧米各国に派遣され、一行は1873年（明治6年）にはベルリンを訪れている。新政府は、近代化のため欧米文化の摂取の必要性を感じ、留学生なども派遣するが、一方で外人教師の招聘にも尽力し、ドイツ人もかなり来日した。こうして直接的接触が活発となる。1872年には文部省外人教師は24人のうちドイツ人8人、1874年には77人中24人数えたという。また、ある資料によると1869～77年の間大学南校の外国人教師69人中14人のドイツ人が含まれ、

(20) 近代日本総年会表、鈴木重貞、田中、沼田などによる。

(21) 田中121ページ

(22) 田中233ページ。他のドイツ医学書の蘭訳書を通じての影響については336ページ

(23) 田中350ページ

地質学のナウマン Naumann の名もみえる。⁽²⁴⁾この他、明治6年開設の東京外国語学校にも数名のドイツ人が雇われていたらしい。⁽²⁵⁾

「ドイツ系文化の移植は大学東校のドイツ医学採用からはじまった」⁽²⁶⁾といわれ、ミュレル Müller, Leopold ホフマン Hoffmann, Theodor ベルツ Balz などの医家が来日している。こうして医学から発したドイツ文化の影響は他の理学系分野や、さらに哲学、法律学などにも拡大されていく。このことから分かるように、ドイツ語系外来語の借用は、先ずこのような学術分野でイニシアティブがとられた。つまり、これらのドイツ人と直接接した医師や学者、ドイツに留学した人々により先ず専門語彙として借用されたであろう。もちろん、これらのかなりの語は今日では廃語となったと思われる。しかしこの一部は一般にももたらされ、今日も使用されている。楳垣は「特に医学や哲学では、どうしてもドイツ語を使わなければならなかったから、外来語もその方面の語が多かった」とし、オブラート、ガーゼ、カプセル、カリエス、プロセント、ゾルレン、テーマ、デンケンなど22語を一般にも使用される例としてあげている。⁽²⁷⁾なお、オブラートとプロセントは既にオランダ語から借用されていたであろう。

明治時代初期の直接的なドイツ人を介した文化接触はやがて次第に後退するが、ドイツの言語文化・学術の影響はその後長く持続する。その際、間接的な文献などによる影響がいつそう強くなったと思われる。

大正末期には特に多数の社会思想用語が借用された。しかしイデオロギー、デマ、グルッペ、テーゼなどを除いて廃語になったという。⁽²⁸⁾ゲゼルシャフト、ゲマインシャフトなどもこの時代の借用であるが、今日一般的ではない。明治末期から大正期にかけてスキーが伝えられるが、以後冬山・スキー用語がドイツ語からかなり借用される。グレンデ、コッヘル、ザイル、ヒュッテ、リュックサックなどである。これらのスポーツ用語は今日もたいてい用いられている。

第二次大戦中は外来語が排斥されたが、わずかの例が入ったようである⁽²⁹⁾ドイツ語の例は、三国同盟の影響もあり、ナチ、ハーケンクロイツ、マイン・カンプフなどが知られるようになったらしい。⁽³⁰⁾これらは、今日歴史用語となりつつあるが、ネオ・ナチなどに再登場している。矢崎がアルバイトはこの時代のアルバイト・ディーンスト Arbeitsdienst 勤労奉仕から生き残ったとしているのは興味深い指摘であろう。

戦後は英米語の優勢に比較してドイツ語からの影響は著しく後退したことは、先述の通

(24) 沼田 424, 425 ページ所収の資料、及び 426 ページ

(25) 田中 547 ページ

(26) 沼田 430 ページ

(27) 楳垣 162 ページ

(28) 楳垣 163 ページ

(29) 楳垣 92 ページ

(30) 矢崎 115 ページ

りである。新しい借用は少ない。矢崎が今なお各方面で使用されているドイツ語系外来語としてあげているアスピリン、エネルギー、ゲル、シャン、バウムクーヘン、リーベなど16語のうち戦後の借用はバウムクーヘンだけであろう。なお、新しい借用については、本稿の4で報告する。

2. 2 ドイツ語系外来語の借用年代と分野

以上のような受容の状況・変遷は現代のドイツ語系外来語にどのように反映されているであろうか。ここで「岩波国語辞典」の収録語について、時代別・分野別の語数を調べた結果を示そう。借用時代の区分については「外来語辞典・東京堂」に従った。もちろん、この場合、専門語としては古いが、一般語としては新しいというものもある。専門分野はあまり細分しないで自然科学（医学・薬学・工学を含む）、人文・社会科学（文学・芸術を含む）、スポーツ、一般と4分するにとどめた。また、他に混種語のうちドイツ語成分が独立見出語として収録されていない語は1語としてカウントした。

	明治以前	明治	大正	昭和	戦後	不明	合計
自然科学	11	35	16	42	14	2	120
人文・社会科学	0	4	8	31	3	2	48
スポーツ	0	0	1	13	2	0	16
一般	0	3	5	6	4	0	18
合計	11	42	30	92	23	4	202

ここで不明語とは、音楽用語のカノン、ゲルトナー菌、シャーレ、モノグラフィーの4語で「外来語辞典・東京堂」に収録されていない。またイデーは「外来語辞典・角川」により明治とした。ここで一般としたのは、アーベント、アルバイト、エネルギー、カイゼルひげ、ゲル、シャン、スピッツ、ゼミナール、ドーラン、フラウ、ヘル、ベンベルグ、マルク、メッチェン、メルクマール、ヨーグルト、リーベ、ワッペンである。ゼミナール、メルクマールは自然・人文・社会科学いずれの分野でも用いられる可能性があるので一般とした。

廃語などについては詳細不明なので以上のデータだけでは十分なものではないが、現在使用されているドイツ語系外来語の借用年代と分野についての大体の特徴は示されていると思う。

語数はどの分野も昭和の借用が最も多く、またこれ以前の借用で87%弱を占めることが分かる。しかし、他方、少ないといっても戦後の借用とされる語も23語（10%以上）数えるのも注目されよう。また分野別では、自然科学が、どの時期も最も多く、全体で半分以上の59%に及ぶことも分かる。これに次いで人文・社会科学が23.7%となっている。8割

以上の語が学術関係に由来しているわけである。

「広辞苑」では時代別のデータが不足のため分野別の数のみ調べたが、それによると自然科学 300, 人文・社会科学 121, スポーツ 43, 一般 53 となり, 自然科学 58%, 人文・社会科学 23% などとほぼ同じ割合を示すことが分かった。

つまり, ドイツ語系外来語の借用は時期的には戦後の借用もあるが, 明治から戦前までが主要な時期であり, また分野については, さらに具体的な語についてみれば, 医学, 薬学, 化学, 理学一般, 哲学, 心理学, 社会学, 経済学, 文学, 音楽, スキー, 登山, その他に及んでいることが分かる。これは, 先述のドイツの言語・文化の受容の集積を反映するものとなっているといえるであろう。「文化史に対する興味ある注釈」⁽³¹⁾であろう。

具体的な語例については3のリストを参照されたい。

3 小型辞典収録のドイツ語系外来語リスト

以下に一般語におけるドイツ語系外来語の例として2小型辞典「岩波国語辞典」と「三省堂国語辞典」の収録語をその異同と共に示す。それぞれ原語, 分野, 借用年代, 訳語または他系外来語, 他の辞典の記載の異同等を併せて示すことにする。なお, 表記上の別形は見出語には挙げず, また省略語との併存の場合は完全形のみ見出語とした。

なお, 略号, 記号は次の通りである。

A: 自然科学, B: 人文・社会科学, C: スポーツ, D: 一般

0: 明治以前, 1: 明治(1869-1911), 2: 大正(1912-1925), 3: 昭和・戦前(1926-1945), 4: 現代・戦後(1945-)

岩: 岩波国語辞典, 三: 三省堂国語辞典, 広: 広辞苑, 外: 外来語辞典・東京堂, 荒: 外来語辞典・角川

英(語), オ(ランダ語), ド(イツ語), フ(ランス語)

<: は原語からの変化がある場合

+: 語義の説明記載があることを示す

3.1 「岩波国語辞典」に収録の語

以下の語の大部分は「三省堂国語辞典」にも収録されている。三に無収録の語は†印で, また収録されているが原語の表示が異なるか, 見出語でない場合は(†)印で区別する。なお, 見出語の()は本稿の1, 2の集計でノーカウントの語

アーベント Abend D, 3+

アイゼン <Steigeisen C, 3+

†アウタルキー Autarkie B, 2「自給自足」

(31) Sapir, p. 193, 泉井訳 197 ページ

- †アウフヘーベン Aufheben B, 2+ 「止場, 揚棄」
 アスピリン Aspirin A, 1+外・英
- (†)アスベスト Asbest A, 0 「いしわた」, 広・英, 三-外・オ
- †アチドーシス Azidosis A, 3+
 アデノイド <adenoide Vegetation, adenoids(イギリス) A, 1+, 三, 広・Adenoid
- (†)アトニー Atonie A, 1+ 「無力症, 無緊張症」, 三・胃アトニーの見出しあり
- †アドレナリン Adrenalin A, 1+
 アメーバ Amöbe A, 1+ 「アミーバ」, 広・amoeba, ameba英. ドイツ語でも動物学
 学分類では Amoeba というらしいので, これが借用されたのであろう。三・
 Amöba はこの混交形か?
- †アルギン酸 <Alginsäure A, 4+
 アルバイト, バイト Arbeit D, 2+, いわゆる学生アルバイトの意味は現代の日本語
 で発生したものである。4. 4, 3 参照
- †アルペンシュトック Alpenstock C, 2+
 アレルギー Allergie A, 3+ 「即時型過敏症」4. 4, 4 参照
- †アンチテーゼ Antithese B, 3+ 「対立命題, 反立」
- †アンチモン Antimon A, 0+ 「アンチモニー」, 外・無収録, 荒・オード
 イデー Idee B, 1 「観念, 理念」, 外・3, 荒・坪内の例証あり
 イデオロギー Ideologie B, 3+ 「観念形態」4. 4, 5 参照
- †イヒチオール Ichthyol A, 2+
- (†)インポテンツ Impotenz A, 3+, 三・インポ(テ)
 ウラン Uran A, 4+ 「ウラニウム」4. 4, 6 参照
- (†)エーテル etherオ, Äther A, 0+, 三・オ, 広・オ系とド系とを区別
 エーデルワイス Edelweiss C, 3+ 「西洋うすゆきそう」, 分野としてはDともとれる
 が, 元来登山の関連で借用されたと思われる。
 エチルアルコール Äthylalkohol A, 1+
 エネルギー Energie A, 1 「精力, 元気」, 物理学の意味は説明のみで訳語はない。三・
 エネの見出しあり。4. 4, 7 参照
 エネルギッシュ energisch D, 2 「勢力的」4. 4, 7 参照
 エピゴーネン Epigonen B, 1+ 「亜流」
 エンゲル係数 <Engel B, 3+
- †オーム Ohm A, 1+
 オナニー Onanie A, 2 「自慰行為」, 関連語として三・オナベツトなる俗語収録
- (†)オブラート Oblate A, 0+, 三・オ, 外・オード, 荒・ポルトガル-オード

- ガーゼ Gaze A, 1 +
 ガイガー計数管 < Geiger A, 4 +
 †カイゼルひげ < Kaiser D, 1 +
 カゼイン Kasein A, 3 + 「乾酪素」
 (†)カタル Katarrh A, 1 +, 三-広・オ
 カテゴリー Kategorie B, 1 「範疇」 4. 4, 8 参照
 (†)カノン Kanon B, ? +, 三・英, 広・「追復曲, 典則曲」
 カフェイン Kaffein A, 2 +
 カプセル Kapsel A, 1 +, 気密室などの意は新しい。4. 4, 9 参照
 (†)カリウム Kalium A, 0 + 「カリ」, 外-三・オ
 カリエス Karies A, 2 +
 カルテ Karte A, 1 「診療記録, 病症録」 4. 4, 10 参照
 カルテル Kartell B, 2 + 「企業(家)連合」 4. 4, 11 参照
 カロリー Kalorie A, 1 +, 4. 4, 12 参照
 (†)ギプス Gips A, 0 + 「ギプス」, 三・オ, 外・オ-ド
 グリコーゲン Glykogen A, 2 +
 (†)クリニック Klinik A, 3 「臨床講義, 診療所」, 三-広-外・英
 クルップ Krupp A, 1 +
 クレゾール Kresol A, 1 +
 クロールカルキ Chrolkalk A, 2 「さらし粉」
 クロロホルム Chloroform A, 1 +
 †ゲシュタルト Gestalt B, 3 + 「形態」
 †ゲゼルシャフト Gesellschaft B, 3 + 「利益社会」
 ゲバルト Gewalt B(D), 4 「暴力行為, ゲバ」, 三・ゲバ, ゲバ棒の見出しあり。4.
 4, 13 参照
 †ゲマインシャフト Gemeinschaft B, 3 + 「共同社会」
 ゲル < Geld D, 3 「金銭, かね, ゲルト」, 岩-三・ゲルトの見出し無し
 †ゲルトナー菌 < Gärtner A, ? + 「腸炎菌」, 外・無収録
 ゲルマニウム Germanium A, 4 +, 4. 4, 16 参照
 ゲレンデ Gelände C, 3 +, 4. 4, 14 参照
 コークス Koks A, 1 +
 ゴチック (Gotik) B, 2 「ゴシック」, 原語無記載, 説明はゴシック Gothic にあり,
 三・見出しゴシックのみ, 広・gothique フ, Gothik ド, 外・ド-フ
 コッヘル Kocher C, 3 +

- (コレステリン) Cholesterin A, 4, この語の見出し無し。コレステロールの項に記載あり。広・英, 外・ド
- (†)コンツェルト Konzert B, 3 「コンチェルト」, 説明はコンチェルト concerto (イタリア語) にあり「協奏曲」, 三・コンチェルトの項に「コンツェルト」言及
- コンツェルン Konzern B, 3 +
- コントラバス Kontrabass B, 2 + 「ダブルベース」
- ザイル Seil C, 3 + 「ロープ」
- †ザイン Sein B, 3 「存在, 実在」
- †サリチル酸< Salizyl(säure) A, 3 +
- ジアスターゼ Diastase A, 1 + 「アミラーゼ」(Amylase)
- †シューマ Schema B, 4 「図式」
- †ジオプトリー Dioptrie A, 4 +
- シャーレ Schale A, ? +, 外・無収録
- シャン< schön D, 2 「美人」, 説明はないが記号により形容動詞の用法も示されている。三・+, 「美人」, 反意語「ウンシャン・ぶす」の記載あり, 広・学生語とし「美人」のみ, ただし「彼女は一だ」の用例をあげている。
- シャンツェ Schanze C, 3 +
- シュプール Spur C, 3 +
- シュプレヒコール Sprechchor B (D), 3 +, 4. 4, 13 参照
- シュラーフザック Schlafsack C, 3 + 「寝袋」, 三・「寝袋, シュラフ, シラフ」この2短縮語見出しとしても収録, 広・+ 「寝袋, スリーピング・バッグ」, 岩-三にはこの英語系の語は無収録。
- †ジンテーゼ Synthese B, 3 + 「総合」
- ストック Stock C, 3 「スキー杖, シュトック」, この原語に近い語形は見出しにはない。ストックはスペルによった英語・ローマ字式発音の干渉か, なお北ドイツではこの発音もある。
- (†)スピッツ Spitz D, 4 +, 三・英。原語に近いシュピッツへの言及はない。ストックと同趣とも思われるが外のように英語説もあり, 英語経由の借用の可能性も考えられる。少なくとも間接的に影響したであろう。
- †ズルチン Dulzin, Dulcin A, 3 +
- †スルフォンアミド剤< Sulfonamid A, 4 +, 外・ド, 広・英
- ゼミナール Seminar D (A, B), 3 「セミナー」。「ゼミ」の見出しあり。説明はセミナーの項でのみ。訳語に「演習」, 4. 4, 15 参照
- †セレナーデ Serenade, sérénade フ B, 3 + 「夜曲, 小夜曲」, 三・フ 「セレナード」

の項に言及

- †ゾルレン Sollen B, 3+「当為」
- †タリウム Thallium A, 3, 外・ド, 広・英・
タンポン Tampon A, 3+「綿球」
- チアノーゼ Zyanose A, 3+
- チタン Titan A, 2+, 外・ド, 広・ギリシア系固有名詞, 荒・ド-フ-ロシア。4.
4, 16 参照
- (†)チフス Typhus A, 0+「チブス」, 三-外・オ
- †ツベルクリン Tuberklin A, 1+
ディーゼル エンジン < Diesel A, 3+。ジーゼル エンジンの見出しもある。4. 4,
17 参照
- テーゼ These B, 3+「定位, 綱領」, 三・「命題」
- テーマ Thema B, 3「主題」, 三・「テーマ音楽, -ソング」などの用例あり。4. 4,
18 参照
- テノール Tenor B, 2「テナー」, 説明はテナー(英語系)にのみ。
- デマゴグ Demagog B, 2+, 三「扇動政治家」
- デマゴギー Demagogie B, 3「デマ」, 説明はデマにある。訳語「流言」。三「扇動,
扇動政治」
- †デモニッシュ dämonisch B, 3+「超自然的」
- †デング熱 < Denguefieber A, 3+
ドーラン Dohran D, 3+, なお Dohran はドイツの会社名とのこと(三-広-外)。
- (†)ドクトル Doktor A, 0「ドクター」, 三-広-荒・オ, 外・オ-ド
トラホーム Trachom A, 1+「トラコーマ」
- †トリウム Thorium A, 2+, 広・英, 外・ド, 荒・ド-英-フ
ナチ Nazi B(D), 3+
ナチス Nazis B(D), 3+, 三は和製外来語で Nazi の複数形としているが原語の複
数形と考えるのが妥当であろう。関連のナチズムは英語系であろう。
- ナフタリン Naphthalin A, 2+
ノイローゼ Neurose A, 4+「神経症」4. 4, 19 参照
- ノギス < Nonius A, 3+, 外-三-小学館国語大辞典・ド, 広・オ, 荒・ポルトガル-英。
なお広に従えば借用年代は 0 となろう。
- バセドー病 < Basedow A, 3+, 広-荒・ドイツ人の説明あり, ただし岩-三-外にはな
し
- バチルス Bazillus A, 1「桿菌」, 他に比喩的用法の説明あり。

- バックェン Backen C, 3+
- (†)(ハトロ紙) < Patronenpapier D, 3. 原語については hard-rolled の転と、このドイツ語が併記されている。荒はドイツ語の Patronpapier からとしているが語形から察すると最も適しているようである。もっとも現今のドイツの辞書にはこの語は収録されていない。Patronenpapier は Brockhaus-Wahrig にはあるが意味からみて直接の関連は不明である。広・ド, 三・オ, 外・英
- パラチオン Parathion A, 4+
- パラチフス Paratyphus A, 1+
- †ハロゲン Halogen A, 2
- ビールス Virus A, 4 「ウイルス」他にヴィールスの見出しもある。説明はウイルスにある。4. 4, 20 参照
- †ヒエラルキー Hierarchie B, 4+, 広はヒエラルヒーが主要見出し「階層性, 位階性」。なお石野・現代はヒエラルキーを誤用としているが、必ずしもそうともいえない。ch の [k] の発音はドイツ語圏でもかなり聞かれる。
- ヒステリー Hysterie A, 0+, 三に見出しヒスがあるがこれは D, 3 の形成であろう。なお外-荒・オ-ド。まずオランダ語から借用され、再度ドイツ語から借用されたと思われる。さらに英語系のヒステリック, 三にはこれに加えてヒステリカルが見出しとして収録。
- ピッケル Pickel C, 3+
- †ヒドラ Hydra A, 4+, 広・ギリシア語固有名詞, 外・ギリシア, 荒・ギリシア-ラテン-ド
- (†)ヒポコンデリー Hypochonderie A, 0+ 「心気症」, 三・オ, 外・オ-ド
- ヒュッテ Hütte C, 3 「山小屋」
- フェーン現象 < Föhn A, 3+, 4. 4, 22 参照
- ブタン Butan A, 4+, 外-荒・英
- †プトマイン Ptomain A, 3+
- フラウ Frau D, 2 「妻, 夫人」
- ブラウン管 < Braun A, 3+, 4. 4, 28 参照
- プラズマ Plasma 「血漿」, 「プラスマ」, 三ではプラスマと物理学のプラズマ plasma (英) は別項。
- プラネタリウム Planetarium A, 3+, 広-外・英, 荒・ド
- プルス Puls A, 1 「脈拍, 脈」
- プレパレート Präparat A, 1+
- プロレタリア Proletarier B, 3+ 「労働者, 無産者」 4. 4, 23 参照

- プロレタリアート Proletariat (ド-ロシア) B, 3 + 「労働者階級」 4. 4, 23 参照
- † ブンゼン灯 < Bunsen A, 1 +
- ベクトル Vektor A, 3 +
- ヘゲモニー Hegemonie B, 3 + 「指導権」, 広「覇権」
- ヘモグロビン Hämoglobin A, 1 + 「血色素」
- ヘリウム Helium A, 3 +, 外・英
- † ヘル < Mohär D, 1 +
- ヘルツ < Hertz A, 3 +
- † ベルツ水 < Bälz A, 3 +. Bälz は来日ドイツ人の名。2. 1 参照
- ヘロイン Heroin A, 2 +
- (†) ベンゾール Benzol A, 2 + 「ベンゼン」, 三-外・英, 荒・英-ド。英語経由か, 発音の干渉が推定される。
- ベンベルグ Bemberg D, 4 +. Bemberg はドイツの会社名
- ポリエステル Polyester A, 4 +, 広・英, 外・ド, 荒・ド-英。
- ポリエチレン Polyäthylen A, 3 +, 広・英, 外・ド, 荒・ド-英-フ。
- ホリドール Folidol A, 4 +
- † ホルスタイン Holstein A, 3 +, 厳密にはホルシュタインなので英語の干渉が推定される。ただしホルシュタイン地方にはこの発音も行われている。
- ホルマリン Formalin A, 1 +
- ホルモン Hormon A, 2 +, 4. 4, 24 参照
- ボンベ Bombe A, 3 +, 4. 4, 25 参照
- マクロコスモス Makrokosmos B, 3 「大宇宙」
- (†) マゾヒズム masochism (英), Masochismus (ド) B, 3 + 「披虐症」, 広-三・英, 外・ドの英語化とする。
- マッハ Mach A, 4 +
- マラリア Malaria A, 1 + 「おこり」, 広-外・英, 荒・ド-英-フ-ロシア
- マルク Mark D, 1 +
- マルクス主義 < Marx B, 3 +. 他に英語系の見出しマルキシスト, マルクスト, マルクシズムあり。
- (†) マンガン Mangan A, 0 +, 三・オ, 外-荒・オ-ド
- マイクロコスモス Mikrokosmos B, 3 「小宇宙」
- † メタノール Methanol A, 3 「メチルアルコール」
- メタン Methan A, 2 + 「沼気」
- † メチルアルコール Methylalkohol A, 1 + 「木精」, 「メチル, メチール」

- メツチェン Mädchen D, 3 「少女, 未婚女性」
- メトロノーム Metronom B, 1+
- †メルクマール Merkmal D (A, B), 4 「めじるし, 指標」
- メルヘン Märchen B (D), 3+ 「おとぎ話, 童話」。もとは文学用語であったろう。
4. 4, 26 参照
- メンス< Menstruation A, 3 「月経」
- †モーゼル銃< Mauser A (D), 1+, 発音は英語化?
- †モノグラフィー Monographie A (B), 3 (?)+, 広・フ, 荒・ド-フ, 外・無収録
- (†)モラル morals (英), Moral (ド) B (D), 3+ 「倫理, 道徳, 習俗」, 広・英-フ,
三-外・英, 荒・オ-ド-英-フ
- †モリブデン Molybdän A, 2+
- ヤッケ Jacke C, 4+ 「アノラック」
- ヨーグルト Yoghurt D, 3+, 4. 4, 27 参照
- ヨーデル Jodel B, 3+
- ヨード Jod A, 1 「沃素」, ドイツ語系外来語ヨードチンキ, ヨードホルムなる副見出しあり。
- †ラーメン Rahmen A, 3+ 「剛(節)架構」
- (†)ラジオゾンデ Radiosonde A, 3+, 三にゾンデのみあり, 逆に岩にこの語なし。
- †ラッセル< Rasselgeräusch A, 3+ 「水泡音」
- ラノリン Lanolin A, 3+, 広-外・英, 荒・ド-英-フ
- リード Lied B, 2+, ドは英語・ローマ字発音の干渉。三・「歌曲, リ-ト」
- リーベ Liebe D, 2 「恋人, 愛人」
- †リゾール Lysol A, 3+
- †リチウム Lithium A, 2+, 外・英
- リポイド Lipoid A, 3+ 「類脂質, 脂質」, 広-外・英, 荒・ド-英-フ。ドの発音はリードと同趣。
- リュックサック Rucksack C (D), 3+, 英語読みの注あり。三にザック収録。
- (†)リンパ Lymphe A, 1+, 広・英, 三・ラテン, 外・ド-ラテン, 荒・オ-英-ド-フ
- ルーペ Lupe B, 3 「拡大鏡, むしめがね」
- (†)ルクス Lux A, 3+, 広・ラテン, 三・フ, 外-荒・ド
- ルンゲ Lunge A, 3 「肺, 肺結核」
- ルンペン Lumpen B (D), 3 「浮浪者」
- †レーゼドラマ Lesedrama B, 3+
- †レプラ Lepra A, 1 「ハンセン病」, 広-外・ラテン, 荒・ド-英-ロシア

- レントゲン Röntgen A, 3 + 「エックス線」 4. 4, 28 参照
 ロイマチス Reumatismus A, 3 「リユーマチ」
 † ワイル病 < Weil A, 3 +
 ワクチン Vakzin A, 3 +, 4. 4, 29 参照
 ワッセルマン反応 < Wassermann A, 3 +
 ワッペン Wappen D, 4 +, 4. 3 参照
 ワンダーフォーク Wandervogel C, 3 +, 三にはワンゲルも収録。4. 4, 30 参照。

3. 2 「三省堂国語辞典」に収録のその他のドイツ語系外来語のリスト

以下の語は「岩波国語辞典」には無収録である。なお(*)は収録されているが、原語表示などが異なる場合である。

- アイスバーン Eisbahn C (D), 4 ? +, 4. 4, 1 参照
 アクリル Acryl- A, 4 +, 4. 4, 2 参照
 アミノピリン Aminopyrin A, 3 +
 アルバイター Arbeiter B (D), 3 +, 4. 4, 3 参照
 アルペン Alpen C, 3 「アルペン競技」
 アレルゲン Allergen A, 4 ? +
 アンギーナ Angina A, 3 + 「急性へんとう炎」
 (*)イオン Ion A, 1 +, 岩-外・英, 広・ギリシア, 荒・ギリシア > 欧
 イコン Ikon B, 4 +
 ウインドヤッケ Windjacke C, 3 「アノラック」
 ウレタン Urethan < Polyurethan A, 3 + 「ポリウレタン」
 エアゾール Aerosol A, 4 + 「エアゾル」, 広「エーロゾル」, 原語の標準発音は
 [aero-]
 エステル Ester A, 3 +
 エチレン Äthylen A, 3 +
 オペク Operation A, 4 ? 「オペラチオン」(この見出しなし), 「手術」
 カール Kar A, 3 +, 広「圏谷」
 カニユーレ Kantùlè A, 1 +
 カルスト Karst A, 4 +
 カンテ Kante C, 4 ? +
 クール Kur A, 3 +

- クランケ Kranke A, 3 + 「患者」
 グルッペ Gruppe B, 3 「グループ」
 グルテン Gluten A, 3 +
 (*)クレオソート Kreosot A, 1 +, 岩-広・英
 グロッケン < Glockenspiel B, 3 「グロッケンシュピール」(この見出しなし), 「鉄琴」
 ゲシュタポ Gestapo B, 3 +
 (*)ケロイド Keloid A, 4 +, 岩・英
 (*)コカイン Kokain A, 1 +, 岩-広・英, 外・ド-英
 コラール Choral B, 3 +
 ザーメン Samen A (D), 3 「精液」
 サッツ Satz C, 3 +, サッツの変化と注あり
 ザック Sack < Rucksack C, 4 ? +
 シーハイル Schi Heil C, 3 +
 シュノーケル Schnorchel A, 3/C, 4 ? + 「スノーケル」, 発音は変化。原語発音
 [ˈʃnɔʁçəl], なお三・Schnörkel は誤り。
 スチロール Styrol A, 4 + 「スチロン」
 ソリステン Solisten B, 4 ? +
 ゾンデ Sonde A, 3 + 「ラジオゾンデ」(この見出し三にはなし, 岩にあり)。「消息
 子, カテーテル」の意のゾンデはオランダ語からの借用。三はこの区別をしない。
 タクト Takt B, 2 「指揮棒」, 岩-広・「拍子, 指揮棒」共に英 tact を原語とみる。外・
 前者を英, 後者をドとしている。
 ダックスフント Dachshund D, 3 +
 ダンケ danke D, 3 「ありがとう」
 タンブリン Tamburin B, 2 「タンバリン」
 チクルス Zyklus B, 4 +
 チゴイネル Zigeuner B, 4 「ジプシー」
 チター Zither B, 4 + 「ツィター」
 ドラマツルギー Dramaturgie B, 3 「作劇法, 演劇論」
 ナップザック Knappsack C, 4 +, 広・ド, 外・英, 荒・オ-英。原語では k は発音
 される。英語経由か少なくともその干渉が推定される。
 ハーケン Haken C, 4 + 「ピトン」
 バーン Bahn C, 4 ? +
 ハイラーテン heiraten D, 3 +
 バギナ Vagina A, 1 「ワギナ」

- バス Bass B, 2 + 「コントラスバス, ベース」, 岩・英
 パトロネ Patrone A (D), 4 + 「マガジン」
 パラノイア Paranoia A, 4 「妄想症」
 (*)バリウム Barium A, 1 +, 岩・英
 ヒーメン Hymen A, 3 「処女膜」
 (*)ビタミン Vitamin A, 3 +, 岩-外・英, 広・ド, 荒・ド-ロシア-欧-英-フ。4, 4,

21 参照

- ピレトリン Pyrethrin A, 4 +
 ヒンターランド Hinterland B, 2 「後背地」三-荒・英, 広-外・ド。直接の借用か、
 英語經由か不明。
 ビンディング < Bindung C, 3 + 「ビンドゥング」(この見出しなし)
 フィルハーモニー Philharmonie B, 3 +
 ブッシュ Busch C, 3 「やぶ」
 プルーク Pflug C, 4 ? 「制動滑降」。原語の Pflug は元来「すき」の意
 プロジット prosit D, 2 +
 ペーハー pH A, 4 + 「ピーエイチ」
 ペニス Penis A (D), 1 「陰茎」広-外・ラテン, 荒・ラテン > ド-英
 ヘルペス Herpes A, 4 ? +, 広・ラテン
 ボーゲン Bogen B, ? / C, 3 三では「バイオリンの弓」音楽用語とされている。こ
 れはあまり使われない。ここには記載されていないが、他にスポーツ用語(スキー)
 「全制動回転」がある。
 ポリウレタン Polyurethan A, 4 「ウレタン」
 ホルムアルデヒド Formaldehyd A, 3 + 荒に 1922 年の例証あり。
 マウス Maus A, 4 「はつかねずみ」
 ムッター Mutter D, 3 「母親」
 メタモルフォーゼ Metamorphose A, 1 「変形, 変身」
 メントール Menthol A, 3 +, 「メンソール」
 モチーフ motif (フ), Motiv (ド) B, 1 + 「動機, 主題」岩・フ
 ラーゲ Lage A (D), 4 「姿勢, 体位」
 ライトモチーフ Leitmotiv B, 3 +, 広「示導動機」
 (*)ラジウム Radium A, 1 +。岩-広・英
 リノール酸 < Linolsäure A, 4 +
 リバノール Rivanol A, 4 ? +
 ルンゼ Runse C, 4 +

レセプト Rezept A, 4+, 4. 3 参照。

(*)レバー Leber A, 3 「肝臓」, 岩・英

ロールシャッハ テスト < Rohrschach A, 4+

4 最近のドイツ語系外来語

4. 1 最近の外来語借用・使用の一般的傾向

最近は何種専門語・特殊語では新しい外来語の借用はますます頻繁になり、さらにこれがマスメディアなどを通じて速やかに、かつ大量に一般語にもたらされる傾向が強くなっている。専門語の影響は、西洋語つまりカタカナの外来語のみではなく、漢語も多いのであるが、新しい語が簡単に翻訳できなかつたり、翻訳がある場合でも漢語が重苦しいとか、同音異義語を生じやすいということもあり、さらに独特のニュアンス——学術的裏付け、知的ニュアンス、新しさ、現代性、上品さ、高級感——のために外来語を使用する傾向が顕著である。これに一般の漢字の素養の低下、また漢字の造語力の低下というファクターも加わろう。つまり、必要やむを得ぬものはもちろん、効果が大きい場合は外来語の方が好んで使用される。そして、その原語の系統は、専ら英米語である。このような語を新聞・雑誌類から拾い出すことは容易であるが、或る程度整理された「現代用語」から少し引用すれば以下のような各分野からの外来語がみられる。

アイデンティティ、インターフェロン、エコロジー、エントロピー、カー・トレイン、シンドローム、(ファイン)セラミック(ス)、テレホン・カード、ニューアカデミズム、ニューメディア、バイオテクノロジー、パフォーマンス、パラダイム、バルネラビリティ、フロッピー・ディスク、ニューリーダー、ライフ・スタイル、リニア・モーター・カー、ワードプロセッサ

さらに最近の新聞の例としてエスニック、ダッチロール、テクノ・ストレス、ポストニューリーダー、レーザーカード、それにジエチレングリコールなどがあげられよう。最後の例はドイツ語系であろう。なお、専門語の一般への経路のひとつに書名がある。手っ取り早く新聞・雑誌の広告に現われる書名を参照されたい。相当な例を集めることができる。

専ら特別な効果から使用される外来語も少なくない。例えば定着した外来語とはいえないが「ブレイクダウンした(かみくだいた)話はなかった」とか「そんなショートレンジの問題かね」(朝日新聞)という政治家の用例がある。前者には注がつけられている。地方自治体も外来語を好むらしい。ポートアイランド・ファッション・タウン[神戸]、クリーン・グリーン作戦[大分](朝日新聞)、なおプロジェクトは官庁の愛用語である。このような外来語を愛用する分野は、周知のごとく広告界一般、モードや化粧品、ホテル・レストラン業界、旅行業、外来のスポーツや芸能の部門などである。しかし、一部の学術専門分野や教養層でも本来の専門用語とならんで、このような外来語一般の愛用傾向がみられ

る。この方面の影響の一部は、例えば教養層の読者をねらっていると思われる「へるめす」のような雑誌のエッセイ類にみられる。より一般的な読者をもつ「朝日ジャーナル」の記事などもこの関連で参照されたい。

さて、最近のやや細かい特色に注目すると英語の定冠詞に由来する「ザ」の借用がある。確かに、雑誌・図書・番組・催事などの名に多くみられる。⁽³²⁾接頭辞的に「全」、「大」、「真」のような意味が感じられる。「ザ」のつくホールもあるらしい。

別の新しい傾向は、より頻繁なローマ字の使用にみられる。雑誌名などの広告にこれが目立つ。Focus, Asahi Journal, ドイツ語の例ではETWAS, Beruf (朝日新聞) という雑誌名の広告がみられた。もっとも自動車とか、電気製品のネーミングには以前から専ら外国語が用いられ、またローマ字も当然のように使用されてきた。オーディオ機器などの指示表示もローマ字が支配的である。これらの傾向の延長であろう。

これと並行して、アルファベットの省略語も最近目立ってきている。これは新聞・雑誌などの普通の文脈でもそのまま用いられ、音声的にもアルファベット読みで発音されている。BGM, CD, CM, FM, LP, LSI, OL, PR などから最近問題となった GNP そして物騒な SDI など多数の例が新聞などにみられる。これらとカタカナ語や漢語、ときにはアラビア数字との合成語もかなり用いられている。省略語でも一語のように発音される場合はカタカナで書かれる可能性もある。「言語」の最近号(1985年9月号)は「ヨコ文字語 総点検」を特集し、この傾向の例を多数示している。ドイツ語系では、ただ1語固有名詞 BMW が収録されている。

これ以外に、借用同化された外来語からの各種の語形成が盛んなのも特色とされよう。多数の合成語形成——他言語系の外来語との合成語、漢語との混種語形成など含めて——がみられる。新しい例ではコンピューター~, システム~, ~-シンドローム, パーソナル~, ビデオ~などの形成が多い。ドイツ語系ではエネルギーやカプセル, カルテル, テーマ, ホルモンなどが合成語を形成している。接辞的な例ではアンチ~, スーパー~, テクノ~, ニュー~, ノ~, ポスト~, マイクロ~, ミニ~, また-ピア, -ポリス, それに俗語の-チックなども新形成の可能性をもっている。

短縮語形成も盛んである。長い多音節の外来語は、以前から2-4音節の省略語を形成することが多かったが、最近では借用が多いのでこの種の形成も——特に4音節の語が——増加したように思われる。アニメ, エアコン, オフ・レコ, シンポ, ハイテク, パソコン, マザコン, マスコミ, ラジカセ, ワープロ, ドイツ語系ではエネ, オペ, ゲバ, ゼミ, バイト, ワンゲルがある。さらにこれが合成語を形成する場合がある。生ワク, 省エネ(船), ゲバ棒などである。

平行形成や対立形成も外来語の多用を促している。例えばバードウォッチングにならっ

⁽³²⁾ 例えば「朝日ジャーナル」1985年13号の雑誌のリストには15誌名が見える。

てカーウオッチング（広告・朝日新聞）、ワードウオッチング（言語）などと応用される。平行形成はもちろん外来語に限らない。対立形成も外来語に限らないが、例えばマスコミに対するミニコミ、ニューリーダーに対するオールドリーダー、ハイテクに対するローテクなどがある。

このような種々の語形成は日本語で形成されるものであるが、カタカナばかりの形成であると、これらのいわゆる和製語はしばしば一見直接の借用のようにみえることになる。一般に英語系の語が多いが、ドイツ語系でもテーマ・ソング、テーマ・キャンペーン、カプセル・ホテルのような英語系の外来語との粉らわしい合成形成がある。

語形成に軽やかな戯れが加わることもある。俗語や、若者の用語に多い。ドイツ語の例では「現代用語」に夜バイト、カーバイト、寝るバイト、アルバイトが収録されている。古い例「デまる」、「ドッペる」にならった「ゲバる」もこの趣をもつ。イデオロギーとアレルギーから形成されたイデレルギー（朝日新聞）やメルヘンとロマンチックから形成されたメルヘンチック（以下4. 4, 26参照）もこれらに近い。

これらの、様々の語形成は、外来語が完全に日本語に同化されていることを示すものであり、このような形成が多いということは、外来語に対する積極性を示すものとして注目されよう。

4. 2 ドイツ語系外来語の情況

既に述べたごとく、今日、ドイツ語を学習する学生や一般人はかつてないほど多く、またドイツとの直接的な接触交流はますます盛んになっているにもかかわらず、ドイツ語の影響は、英米語系の外来語の氾濫のなかにあつてあまり目立たないし、その必要性もないかのようである。これを裏書きするかのように、新聞・雑誌には東西ドイツ或いはドイツ語文化圏の政治・文化についてのニュースや紹介などの各種記事は非常に多いが、固有名詞と一部のこれに準ずる語を除けばドイツ語系の外来語は少ない。特に新しい借用は稀とっていいくらいである。例えば、「ドイツの年——日本の文化受容を考える——」（図書1984, 12）ではかなりの外来語がみられるが、ビデオアート、シンポジウム、パフォーマンス、ヴァライエティ、イメージ、エモーションなど英語系の語が大半である。ただひとつ「最近ドイツで舞踊演劇（タンツテアター）とよばれているものは、バレーとは明らかに違うものだ。」と訳語と共に（ ）のなかに新しい語が控え目に紹介されている。なお固有名詞としてシャウシュピールハウス、シャウビューネがあげられている。これ以外のドイツ語は以前の借用のイデオロギーが数回、ベクトルが一回用いられているにすぎない。また「朝日ジャーナル」（1985, 1, 44~50ページ）のアンケート特集記事の用語もドイツ語の現況を示しているであろう。カルチャーシーン、クロスオーバー、アンダーグラウンド、オリジナルキャスト、パフォーマンス・アーティスト、アマチュアリズム、サブカルチャー、ハイテック時代、スペクテーションと目新しい英語系の語がひしめいているなか

で、ドイツ語系はテーマ、アンチテーゼ、ドラマトゥルギーの3語にすぎない。これらの語はいずれも以前の借用である。もっともテーマ以外の2語は必ずしも一般になじみの語ではないが、同誌の一般記事でも似た傾向があり、目立つドイツ語系の語はイデオロギー（愛用語の感あり）、エネルギー、テーマなどの既になじみの一部の借用語である。

以上の2例は現代のドイツ語系の外来語の状況を端的に代表しているように思われる。つまり、新しい借用は皆無ではないが、少ない。そして、英語系の語が多用されるなかで、既に借用されたドイツ語系の語が、数は少ないが、かなりの頻度で手堅く用いられているという状況である。このような語は、先述のように造語面でも生産的である。これにドラマトゥルギーのように頻度は非常に低いが、ドイツと密接な関係にある——或るいは過去において影響を受けた——分野や筆者による専門語の使用が加わる。これらの語彙はタンツテアターのように新しい場合もあるが、既に古くから借用されているが、一般語には知られていないような語も含まれる。従って一般語からみれば、これらの語はその周辺部に属するものである。しかし時に目新しいという効果、或るいは高級感・学術性・知的雰囲気をもたらすであろう。このような例を少し引用しよう。

デモーニッシュ、アイコン、ゼツェッション、プロレタリアート、ユンカー貴族、フモリスト[広告文]、マイクロコスモス、メタモルフォーゼ、ホメオパティ、アントロポゾーフ(朝日ジャーナル)、マイスター制度、コラーゲン、シャーレ、ネフローゼ、ホルムアルデヒド、マウス、ベートーベン・チクルス(朝日新聞)、マクロコスモス、デリカテッセン、カテゴリー、パトグラフィー[「病誌」の注あり]、イコノグラフィー(へるめす、1)、ヒペルネムジー[「過剰記憶」の注あり]、キッチュナ、ヒエラルキー、ヒンターランド(同、2)、プロブレマティーク、アンビバレンツ、メルクマール、ドラマツルギー的言葉(同、3)、エートス、ゲワン(増田)、ジンテーゼ、アウフヘーベン(土屋)、コルヒチン、ヘモグロビン(岡田)、ゲシュタルトプシヒョロギー、シツォフレニー、ダーザイン、ズエンターゼ、ゲゼルシャフト、ゲマインシャフト(ブレイエ-河野)

このような専門語の周辺にある語の表記はしばしば意識的に原語に近づけられる。上のズエンターゼはジンテーゼのことである。ドイツ語関係者では例えばミュンヘン、メ(-)ルヒェンなどが好まれる。また、これらのテキストでは時に原語が添えられたり、原語のみが引用されることもある。

4.3 新しいドイツ語系外来語

新語借用の数量は確かに英語系の語に比べれば問題にならないくらい少ない。しかし2及び3で示したように、小型の「岩波国語辞典」と「三省堂国語辞典」には現代の借用とされる語が50数語収録されていて、これはドイツ語系外来語全体の割合からみれば決して少ない数ではない。ここには次のような語が収録されている。

アクリル、アルギン酸、ウラン、ゲバルト、ゲルマニウム、ケロイド、シェーマ、スチ

ロール、ストック、スピッツ、チクルス、ノイローゼ、ハーケン、パトローネ、パラチオン、パラノイア、ビールス、ヒエラルキー、ボタン、ポリウレタン、ポリエステル、マウス、レセプト、ワッペン

さらに「現代用語」が収録する新しい語にキッチュ、クアハウス、コルヒチン、シーラングラウフなどがある。

このなかでゲバルトは原語の「暴力[行為]」の意で借用され、1968年には一種の流行語となり、ゲバ、ゲバ棒、内ゲバ、ゲバるのような語が生まれた。流行語の一般傾向として現在は頻度は急速に低下している。なお以下4. 4, 13参照。

ワッペンは1964年以後の借用らしいが原語の「紋章」という意味ではなくブレザーなどにつけるアクセサリーの意味で用いられた。当時こどもの間で流行したもののようである。最近国鉄の分割・民営化反対の「ワッペン着用」が話題になり、また街頭集会などでワッペンが配られたりする。

レセプトは社会保険診療報酬の「請求明細書」を指すものとして最近話題になっている語である。この語はしかし医家の間ではかなり古くから用いられていたのではないかと思う。ただし、意味は「処方箋」の類であったと思う。原語では「処方(箋)」, 転じて料理などの「調理法」を意味する。発音は元来レツェプトであり、変化したと考えられるが、ひょっとしたらオランダ語時代の影響があるかもしれない。因にオランダ語では *recept* [rə'sɛpt] である。

コルヒチン *Kolchizin* は最初は生物学などで知られていた薬品であるが、最近難病治療に応用され一般に知られるようになったらしい。⁽³³⁾

シーラングラウフ *Skilanglauf* はもちろんスポーツ用語であるが、これには英語系のスキーマラソン、クロスカントリーがあり、こちらの方が一般的かもしれない。関連の語にウォーキングスキーという和製語があるらしい。なお原語の発音は *Ski* [ʃi:] である。

キッチュ *Kitsch* は元来「無趣味な芸術作品や工芸品」を意味する語で、一部ではかなり前から用いられていた。最近「現代用語」に収録され「低俗風の商品」などと説明されている。「キッチュな雰囲気」(へるめす, 2), 「いわゆる近代建築というのが本当にキッチュにみえる……」, 「……の市場街, 新宿の歌舞伎町をかけあわせたようにキッチュで, ……」(同, 3) などの用例がある。

「現代用語」85年版に収録された新しい語に温泉の施設クアハウス *Kurhaus* がある。原語では温泉地の保養客用の娯楽施設やホールなどをもつクラブハウスを意味する。この語は目下のところまだ固有名詞に近い感じで用いられているが、やがてツーリズムなどの分野で一般的になるかもしれない。既に雑誌の広告に「全国クアハウスガイド」という記事

(33) 「現代用語」85年版 896 ページ

のタイトルが紹介されていた（朝日新聞）。

この他専門語に近いアイコン、ゲノッセンシャフト Genossenschaft やスキー用語ウエーデルン Wedeln、住宅関係のハイム Heim など新しい借用であろう。

ところで辞書類に収録されていない、或るいはされる見込のない、日本語への同化が感じられない新しい語は、外来語というより外国語の引用というべきものであろうが、このような語も新聞・雑誌などで一般の読者にもたらされることがある。先述のタンツテアターもこの例のひとつであろう。「朝日新聞」のドイツの教育事情を報じた記事にはアビトア、ギムナジウム、リアル・シューレ、ハウプト・シューレ、ゲザムト・シューレがみられる。ギムナジウムのみは「広辞苑」に収録されているが他は新しい。また現代ドイツの作家エンデの紹介記事では、メルヒェン・ロマン、ファンタージェンがみえる。筆者はドイツ文学者である。また最近のワイン騒動に関連の記事にはシュペートレーゼ、アウスレーゼ、また料理記事にザークラウト、シュヴァルツヴェルダー・キルシュ・トルテなどが紹介されている。

直接ドイツの風物に関連した著作では、もちろんこのような目新しい語が多い。それは必要上もあるが、雰囲気のためにも意識的に使用される傾向が強い。例えばコンツェルト・マイスター、ハイターカイト、ディルンドル、ゲミュートリヒ、ホイリゲン、シュトローフェン・リート、カスターニエン（小塩）、ゲデンクターフェル、ヌメルス・クラウズス〔この語元来ラテン語〕、パーテンタンテ、レツェプト〔菓子の材料表・作方、元来「処方」の意、なお、先述のレセプト参照〕、カルテス・エッセン、ツッカーテューテ〔おやつのはいった袋、新入児童がもらう〕、ガスト・アルバイター、ブルスト、カンティーネ、アイントップ・エッセン、アッペルザフト（大沢）など多数の例がみられる。また「未来」のドイツの農村調査についての記事のなかにメッセディーナー、ファッケル、ガストシュテッテ、ハーフェル、ゲルステ、ガッセなどがある。これらの語には日本語の注釈がつくことも多いし、さもなくば前後になんらかの説明がみられる。そうでないと一般の読者には理解できないであろう。このような語は適切なこれに代る語がないことが多く、翻訳しにくかったり、独特の雰囲気を伝えたいために用いられていることが分かる。例えばディルンドルは南ドイツなどの婦人用の民族衣裳であるが、なかば固有名詞みたいなもので訳せない。またこの筆者も述べているがゲミュートリヒなどという語は日本語に訳しにくい。その点他の語がある場合、例えばブルストはソーセージでいいかもしれない。しかし、本物のドイツのそれを表すには原語が雰囲気を伝えるかもしれない。この点でハーフェル、ゲルステは燕麦、大麦で充分かと思うが、しかしガッセはまた雰囲気を伝える可能性がある。

なお、専門語やこのようなエキゾチシズムの語では漢語・和語表現へのルビの方法もしばしば用いられている。また、専門語に類するものであるから、ここでも原語の引用もしばしばみられる。

ここにあげたような語は、もちろん一般の語彙に入る可能性はほとんどないであろう。しかし外来語借用のイニシアティブの例として注目されるであろう。

4. 4 出現頻度の高いドイツ語系外来語

最後に現代において特に頻繁に用いられている語について概観したい。これに関して参考になるデータは少し古いですが、やはり 20 年前の新聞用語についての国立国語研究所の調査結果である。当時頻度の高かった語については既に 96 ページに引用しておいたが、これらの語は現在もたいていしばしば用いられている。以下、これらの語を中心に、さらに最近頻度が高いと思われる語を紹介する。

1 アイスバーンは「現代用語」によるとスキー用語で「斜面が氷状に固った状態」をいう。原語では、一般にスケート場を指し、「外来語辞典・角川」にも説明されているが、日本語でこの意味でも用いるのであろうか。それより最近凍結路面を指すのにも用いられているようである。これは原語で普通は *Glatteis* という。

2 アクリルは主にポリエステルなどと共に繊維関係その他でしばしば用いられる。同様に素材を表わす語（ポリ）ウレタン、ポリエチレンなどが日常も聞かれる。

3 アルバイトは戦前は「労働・研究」及び「(学者の)業績」の意味でのみ知られていた。この意味は原語にもある。しかしいわゆる学生などの「内職」の意味は戦後、日本語で生じたと推定される。つまり原語の「労働」の意味の特殊化といえよう。ただし、先述のように（98 ページ参照）アルバイト・ディーンストから影響を受けたかもしれないが。原語ではこの意味はなくこれは通常 *Nebenarbeit* または英語系の外来語 *Job* が用いられる。この語は印刷言語ばかりでなく、音声言語でも頻繁に用いられる。これに関連した語アルバイトも借用されている。この語は原語「労働者」の意味をもつが、日本語ではこの意味でも知られているが「アルバイトをする学生・人」の意味でも用いる。これはしかし最近はいよいよアルバイトですまされている。つまりアルバイトはアルバイトの意味でも用いられる。「朝日新聞」に「高校生のアルバイト」というシリーズが最近掲載されたが、ここではアルバイトはいわばキーワードとなっている。「学校がアルバイトを禁止しても……」、「アルバイト学生、一先、一誌、一する」など多数用いられている。「高校生のアルバイトに頼る」などでは「労働」そのものか「人」かはすぐには区別できないということもある。「私はその頃、アルバイトの帰りなど、よく古本屋に寄った。」(柴田)は文学作品からの例である。また高野「二十歳の原点」には多数のアルバイト、バイトがみられる。アルバイトの例には「アルバイトと正社員と二段構えになっています。アルバイトの方から説明しますと——……99%がアルバイトであり……」(言語生活)がある。この語の俗語の語形成については既に紹介したところである。関連の語に英語系のパートタイマー、一タイムがある。

4 アレルギーは元来医学用語である。この原語自体ギリシア語系の学術造語(1906年)

である。この語はまず新聞・雑誌の医学記事で本来の意味で用いられる。「岩波国語辞典」には「即時型過敏症」という訳語がみえるが余り用いられない。「独和大辞典」なども「アレルギー」しか示さない。「アレルギーの原因になるのは……」,「アレルギー体質」(朝日新聞)など。関連の借用にアレルゲンがある。「岩波国語辞典」には記載されていないが、この語はさらに一般的に「過敏な反応」に転用される。「『アメリカナイズ』に対するアレルギーもなくなっていった。」「たくさん書きすぎて、もうアレルギー症状をおこしている」(朝日新聞)などと用いられている。合成形成では「核-, 警察アレルギー」がある。なお「外国人アレルギー」(朝日ジャーナル)という例もある。さらに「英語アレルギーの治しかた」という書名や最近「飛行機アレルギー」(朝日新聞)なる見出しがみられた。

5 イデオロギーもきわめて頻度の高い語である。特に「へるめす」や「朝日ジャーナル」の愛用語である。例えば「へるめす」1号の138~151ページの「ジェンダーの文化人類学」には非常に多い。「イデオロギーとしての文化」,「ひとつのイデオロギー性が、他のイデオロギー性をあばいたのであり……」,さらに「文化一、男性優位イデオロギー、イデオロギー的」など少なくとも20回を下らない。さながらキーワードの感がある。「……さんはもともとイデオロギーとか組織とかにこだわらない人らしい。」「……すでに失われた『故郷』への空想的回帰のイデオロギーであったことを……」は朝日ジャーナルの例である。訳語「観念形態」は余り用いられない。

6 ウランは原子力発電・核燃料の用語として欠かせない。事故などの報道にも現われる。「濃縮ウラン」なる形成がある。同意のウラニウムは今日用いられない。「採掘されるウラン鉱石の3割は日本の原発で使われている。」(朝日ジャーナル)

7 エネルギーは既に「勢力」と物理学の用語として明治時代に借用されている。が特に頻繁に用いられるようになったのは1970年代の石油危機以降であろう。最近では政治・産業界で資源・軍事関係の中心的重要語となり多数の合成形成を生みだしている。「石油を始めとするエネルギーの国際価格が急上昇……」,「省エネ(ルギー)、石炭一、原子一、一次エネルギー、エネルギー革命、一サミット、一産業、エネルギー・ビーム、指向性エネルギー兵器」など(現代用語)。「勢力」の意味の用法も多い。「たとえば、乗っ取りをめぐる無駄なエネルギーの消費は……」(現代用語)、「ヤミ経済のエネルギーには、差別されるものの怨念というのが噴き上っていて……」,「中央指向のエネルギーはすさまじく……」(朝日ジャーナル)。これに関連するエネルギーギッシュもよくみられる。「……タレント自身のナマの生活体験のライブでエネルギーギッシュな噴出だ。」とか「……ロンドンの若手のエネルギーギッシュでアバンギャルド(前衛的)なデザインが魅力的なものになっているのです。」(朝日新聞)など。

8 カテゴリーは「新聞の語彙」のデータにはない語で、一般の語としては余り用いられないが教養層では好まれる。イデオロギーで紹介した「へるめす」のエッセイの最後の部

分は「カテゴリーと個人」と題され、この語が20回以上現われる。「文化が配当するカテゴリーを個人レベルで引き受けるカテゴリーと……」。この訳語「範疇」は最近は余り用いられない。関連の語にテーゼ、アンチテーゼなどの語がある。

9 カプセルも古い借用であるが、それは薬品の入ったカプセルである。この意味で今もちろん使用される。「1日1回1カプセルを食後に服用します」(壮快)。朝日新聞のコラム風の医学に関する連載小記事に「かぶせる」というのがある。これに対し最近頻繁なのは「カプセル・ホテル」などにみられる空間的意味である。これはもちろん宇宙船の「カプセル」の延長であろう。従って英語のcapsuleからの影響、一種の意味借用の可能性であろう。さらに「タイム・カプセル」も影響しているであろう。この語は英語系の借用である。因に原語でもKapselは「円形、卵型の小型容器」をもさす。このドイツ語はラテン語capisula「小箱」にさかのぼる。最近「カプセルイン、一オフィス、一店舗、一人間」というような語が「現代用語」に収録された。

10 カルテはいわゆる「診療簿」の意味の医家の用語として既に明治時代に借用された。しかし一般に広く知られるに至ったのは割合最近であろう。医療関連記事で「カルテを押収する」(朝日新聞)、また「学校病カルテ」(朝日ジャーナル)のような用例もある。なお、この原語は周知のごとく「カード」の意であり、古い「カルタ」、それに「カルテ」、「カード」は同語源の語の異なった原語からの借用で意味も分業となっている点に注目しておきたい。

11 カルテルはエネルギーと並んで現代政治・産業界の重要語である。「企業連合」などの訳語は用いられない。「価格一、共同販売一、国際一、資源一、生産制限一、不況一、ヤミー一、違法カルテル」など多数の形成がある。関連のコンツェルンはこれほど使用されない。

12 カロリーは栄養に関するテキストではなくてはならない。いわゆるダイエットの関連でも現われる語である。「海藻類はカロリーが少ない……」、「カロリー計算、低カロリー食品」(安心)。

13 ゲバルトは「新聞の語彙」にはない新しい借用である(4.3参照)。原語では「権力」、「暴力」、「激しさ」の意があり、元来我国では法律関係で知られていた語と思われる。この第2の意味「暴力[行為]」で一般にもたらされた。一時はかなり頻度が高かったが、最近ゲバルトはめったに聞かれず、「ゲバ棒」、「内ゲバ」が時々話題になる程度である。「ヘルメットとゲバ棒で身を固めた……」(高野)。この語に関連してシュプレヒコールも一般に知られるようになった。この語は元来演劇・音楽関係で先ず知られていたらしい。しかし一般にはデモの際のスローガンなどの一斉唱和を指す語としてのみ知られている。今日ドイツでも一般の辞書では、この意味と、唱和する人々のグループ、それに唱和される言葉そのものを意味する語としてのみ説明されている。「独和大辞典」には最後の意味の記載はない。「……などのシュプレヒコールを上げながら農道をデモ行進」(年報)

14 ゲレンデは「新聞の語彙」には含まれない語であるが、最近ではスキーが大衆化したせいかよく用いられる。原語では「土地、地域」、「敷地」などを意味するが日本語では「スキー場」の関連でのみ用いられる。シュプールもスキー場で滑った跡のみを意味するスキー用語である。原語では「足跡」、「痕跡」、「車線」などの意味をもつ。ストック（シュトックの変化）は原語では広く「杖、ステッキ」の意であるが、「スキー杖」のことである。これらの語はスキーに関連して登場する。スポーツの用語ではさらにアイゼン、ザイル、ピッケルなどが登山用語として用いられる。

15 セミナールは大学関係ではゼミなる短縮語も形成され、なお愛用語の感があるが、一般にも用いられる。この語はドイツ語でもラテン語からの借用であるが、原語では「演習」、「研修会」、「研究科、研究室」、「神学校」、「教員養成所」の意味がある。最後の意味は古い。いわゆるゼミナールは大体このうちの最初の三つの意味で用いられる。ただし「研究科」の意味では稀であるが、特定の研究グループを指す場合、つまり教授名や学科名を付した〜ゼミ（ナール）はこの意味に近い。「演習」という訳語も正式には用いられる。「研修会」の意味では今日英語系のセミナーの方が一般的である。ゼミナールの頻度は以前より多分増加しているが、一般ではセミナーはこれを上回る頻度となっていると想像される。「新聞の語彙」のデータでは当時セミナーは10回を記録している。なおこのセミナーなる英語はドイツ語からの借用である。「神学校」や「教員養成所」の意味では現今普通は用いない。関連の英語系の語にセミナリー、ポルトガル語系のセミナリヨがあるが、前者は一般的でないし、後者は歴史的用語にすぎない。同語源の多様な借用としては興味深い例であろう。派生語ゼミナリストの用例があるがもちろん一般的ではない。

16 チタンは今日頻度が増す可能性がある。「チタン建材」やチタンのメガネ・フレームが現われたから。チタンは元素名であるが、他にリチウムがリチウム電池と共に一般でもよく用いられるであろう。この2語は「新聞の語彙」では夫々1回現われたただけであった。

17 ディーゼルはディーゼル車と共に必要であろう。その排ガスの発癌物質やその微粒子の花粉症への関係などが話題になったりもする。Dieselは元來人名。

18 テーマは頻度の高い語である。「主題」という意味以外音楽用語としても知られている。テーマ・ソング、ミュージックはかなり前から知られているが、最近テーマ・キャンペーン、一プロモーションなる新しい販売政策用語が生まれている。

19 ノイローゼもしばしば登場する語である。英語系のストレスという語とともに現代生活の複雑さを反映する語となっている。「実は、主役のキンスキーもひどいノイローゼに陥っていたのだった。」（へるめす2号）、「フロイトもノイローゼの病理学から出発して……」（プレイエ-河野）。「……もともと少しノイローゼ的な傾向がありますが……」（暮しの手帖）、「日本人のノイローゼの特徴は何か……」（朝日ジャーナル）、「不眠ノイローゼ」（安心）。

20 ビールスは、元来ラテン語であるが日本語にはドイツ語から借用された。ヴィールス、ウィルス、ウイ(一)ルスそれに英語系のヴァイラス、バイラスなど様々な表記が用いられてきた。「新聞の語彙」のデータによると1965年頃はビールスの方がウィルスより多く現われている。しかし最近は少なくとも新聞記事からはビールスは姿を消し、ウィルスが用いられるようになってきている。放送などでも公式的にはそうである。「外来語辞典・角川」に引用の朝日新聞社『新聞語』の説明によると「戦後、日本医学会の医学用語整理委員会はビールスと統一するのが望ましいという中間報告を出し、教科書もビールスとしたが、1953年ビールス関係の学者が集って、日本ウィルス学会を結成したため、言葉が混乱しはじめた」らしい。この記述は1963年のものであるが「新聞の語彙」のデータは正しくこの時期にあっている。別の証言によると「ドイツ語の *Vakzin* を『ワクチン』とよびならわしており、元来ラテン語の (v) は『ウ』の音だから『ヴィールス』もこの際『ウィルス』がいいと強く主張する人もあって、*Virus* を専門に研究している人やその学会は『ウィルス』一本に統一することになり、……のどちらを使うかについてはげしい議論がありました。その結果両者併用ということになり、『ウィルス学者』には『ビールス』をみとめない人が多く、他の医者は『ウィルス』と『ビールス』を自分のいいようにつかい、一般の人はどちらかといえば『ビールス』をつかうという、妙なことになっています」⁽³⁴⁾という。新聞はこの二十年間に少なくとも公式的にはウィルスに統一されてしまったようである。岡田や「暮しの手帖」の記事「ウィルスとはなにか——肝炎ウィルスはここまでわかってきた」なども終始ウィルスを用いている。一般の音声言語ではしかしウィルスは目下稀である。あるテレビ放送でアナウンサーがウィルス、対談する医家のひとはビールス、もうひとはバイラスを用いているのは印象的であった。この英語系のバイラスはそれほど一般的ではないと思われるが専門家の間では並行して用いられていると思われる。マス・メディアのウィルスへの転向は高級感のある学識語への同調であろうか。興味ある現象である。アデノー、インフルエンザ、ポリオ、肝炎ウィルス、ウィルス発癌、抗ウィルス剤などの形成が知られている。関連のリケッチア *Rickettsia* はつつがむし病などの病原体であるが一般的ではない。

21 ビタミンはいうまでもなく現代の高まる健康志向とともに欠くことのできない語となっている。「新聞の語彙」のデータではビタミンは単独で最も多く用いられているが、またA、C、Dと共に現われている。さらにBも一般的に知られているし、今日Eが頻繁に話題になっている。「総合ビタミン剤」なる語がある。

22 フェーンは元来南ドイツのアルプス越えの暖かい乾燥した春先に吹く南風を指す。「独和大辞典」では「フェーン」なる外来語と説明を掲げている。つまり訳語はない。これを

(34) 「緒方富雄・解体新書にことよせて——医学のことばの二百年——」言語生活 274号 (1974) 所収

我国の類似の気象現象に適用するため「フェーン（現象）」として借用した。一般的に知られ用いられている。

23 プロレタリア この語は最近はそのほど頻繁とはいえないかもしれないが、一般にはよく知られた語に属する。「プロレタリア文学と農民文学」（朝日ジャーナル）。関連のプロレタリアートも散見する。「ひとたび共産党のプロレタリアート独裁を揺るがす事態になれば……」（朝日ジャーナル）。

24 ホルモンも元来ギリシア語に由来する医学・薬学・生物学用語であるが、今日広く一般の語となっている。「臍臓から分泌されるインスリンというホルモンの助けをかりて……」（安心）、「……短期間に限り副腎皮質ホルモンを使うことがあります。」（朝日新聞）。多数の合成語が形成されている。「黄体一、開花一、植物一、性一、成長一、男性ホルモン」など。俗語では「ホルモン焼」というのが辞典類に収録されている。

25 ボンベも日常語であろう。この原語の主なる意味は「爆弾」であり、「高圧ガス容器」の意味では正式には Gasflasche が用いられる。しかし俗語では Bombe にもこの意味があるらしく、これから借用されたのであろう。ただ「広辞苑」や「国語大辞典」に収録のガスボンベは原語では通常「毒ガス爆弾」を意味する。

26 メルヘン この語は「新聞の語彙」にはみられないが最近非常に目立つようになった。グリム兄弟の生誕二百年記念やミヒャエル・エンデの翻訳などのせいもあろう。さらに、技術時代のなかで高まっている空想・幻想的なものへのあこがれも関連しているかもしれない。元来この語には「民話、童話、おとぎ話」などの語があり、「グリム童話」などと用いられてきた。エネルギー、ビールス、ホルモンなどのように翻訳できない語とはこの点で異なっている。すなわち語彙単位の不足からではなく独特の効果から好まれるようになったといえよう。「グリムのメルヘンはある程度読んでいたが、……」（高橋）、「世界のメルヘン」、「文学座の公演『黄昏のメルヘン』は、そうした愛の形を探った心優しいメルヘン、というより愛の不条理を究明したかなしみのうただ。」（朝日新聞）。広告類に「大人のメルヘン、……お年寄りたちの日常と死をみつめた感動のメルヘン」、「メルヘンおはなし絵本、美しい夢と楽しいメルヘンがページいっぱいにあふれます。」、「メルヘンお弁当はいかが？」（朝日新聞掲載）などの例がある。「……宇宙的に女心をメルヘンするシンガー」（ザ・テレビ）という例もある。先にもふれたメルヘンチックは俗語の形成であるが新聞にも現われる。朝日新聞は「いまメルヘンチック」という見出しでこのブームについて報じている。「彼女のメルヘンちっくなおしゃべり」、「なんともメルヘンティックなものを感じたのであるが、……」（ザ・テレビ）などの用例がある。この語が固定するかどうか分からない。多分に流行語の感がある。

27 ヨーグルト Yo-/Joghurt はトルコ語に由来し、英語でも類似の語形を示すが日本語はドイツ語から借用した。今日様々な種類の製品と共に健康食品として絶えず話題になる。

「プレーン・ヨーグルト」という形成がある。

28 レントゲンは周知のごとく元来人名に由来する。この語は医療関係では依然としてその多様な利用とあいまって頻繁に用いられている。医療関係ではないが、人名に由来する語ではブラウン管も「テレビの画面」の意味でよく用いられる。原語では普通 Bildschirm を用いる。

29 ワクチンは vaccinus < vacca なるラテン語に由来する。原語では今日普通 Vakzine が用いられ、Vakzin は稀とされている。この語も今日よく知られている。予防医学が進歩してさまざまなワクチンが一般にも知られている。「百日咳一、風疹一、麻疹一、おたふくかぜ生ワクチン、弱毒性生ワクチン」。「従来のワクチンに比べて数倍から十倍も効力を増強する新しいタイプのワクチン製造法が……、肝炎ワクチンなど、他のワクチンでも利用できる……」（朝日新聞）などの例がある。類似の語にツベルクリンがあるがこれもなお使用される。

30 ワンダーフォーゲル この語も「新聞の語彙」にはない。しかし学生間ではかなりよく用いられる。ワンゲルなる短縮語はその証拠であろう。元来「渡鳥」転じて「放浪生活者」などの意であったが、1901年以降いわゆるワンダーフォーゲル運動をさすことになった。おそくとも大正時代末には我国にも伝えられたらしい。「二十世紀初頭から二十年代にかけて、ドイツ国内ではワンダーフォーゲル運動を中心とする青年運動が高揚した。最近、ドイツ国内でもこの運動の見直しがなされ、……」（朝日ジャーナル）。「ワンダーフォーゲルは私の生活とは切っても切れない縁であるから。」「……ワンゲルの連中にあいに行くため。」（高野）。「ワンダー・フォーゲルというドイツ語はもう日本語になっているが、このワンダー（ン）というのは、車を使わず早足で森の中を何十キロも歩くことをいうのだ。」（小塩）。関連でリュックサック、ナップザック、ザック、シュラ（一）フ、ヤッケ、ひよつとしたらコッヘル、ヒュッテなども用いられるかもしれない。

以上およそ 30 語を中心に比較的頻度が高いドイツ語系外来語を示したのであるが、これらの語の多くは訳語やこれに代る語が無い点が注目されよう。その分野についてみると、半数以上の 17 語が医学・自然科学系、7 語が人文・社会科学系、その他はスポーツが 3 語、一般が 3 語となる。この一般の 3 語も元来学術関係・学生語から一般にもたらされた語である。一方借用年代は 24 語が戦前となっていて、大体 2 で紹介した特色がここでも認められよう。

なお、テキストの種類、筆者により、或いは分野により 3 のリストで挙げたような他の語が適宜用いられるわけである。時に特定の語が多用されることもある。また思いがけない語が頻繁になることもある。最近ゲルマニウムなる元素名がトランジスター関係でなく健康関係の雑誌に掲載の広告でやたらに目につく。どんな効果があるのであろうか。これなどその例であろう。

5 要 約

以上は現代日本語の一般語彙におけるドイツ語系外来語の概要であるが、要約すれば、先ず外来語の数量は辞典類の収録語数に対しては約5%、そのうちドイツ語系は5~6% (全語数の0.3~0.4%)、実際の語数は一般の小型辞典で凡そ200語程度、「広辞苑」クラスで500~600語と推定される。一方、実際の新聞・雑誌などのテキストで使用される外来語は、異なり語数からみた割合は10~12%、そのうちドイツ語系は全外来語の僅か1~2%、また述べ語数からみた外来語全体の割合は3~4%、ドイツ語系はその全外来語の1~2%と推定される。

小型辞典に収録されていて、基本的と考えられる二百数十語のリストは3で示した。

また、借用年代は明治から現代に及ぶが、8~9割が戦前の借用である。また分野は医学・薬学・自然科学系が凡そ6割、これに次いで2割強の人文・社会科学系の語、残りがスポーツとその他一般である。一般の語としたものにも元来学術語に由来するものが含まれている。

最近は、ますます優勢となってくる英米語系の外来語に比較してドイツ語系外来語は余り目立たなくなっている。先ずかつてのような体系的な学術用語の借用は今日の日本語では最早不要であるという状況がある。そして新しい概念・事物の多くはドイツ語圏からではなく、英米語圏からもたらされる。しかしドイツ語からの新しい借用の可能性が全く無くなったわけではない。そのいくらかの例は4. 3で紹介した。他方、英語系外来語の氾濫するなかで、なお以前に借用されたかなりの語が日本語の一般語彙のなかで不可欠の重要語として確実に用いられているという状況が注目される。その代表的な30語を、その関連語と共に4. 4で紹介した。

以上で、恐らくドイツ語系外来語の現代日本語における状況の概要が明らかになったと思われる。さらに翻訳借用の調査、明治以後の諸文献などによる史的調査が加わればドイツ語の影響の詳細が明らかになるとと思われる。

引 用・参 考 文 献

引用は著者名またはタイトルを用いるが、そうでない場合は以下の表で「」を付してある。

岩波国語辞典 第三版 東京 1979

「外来語辞典・角川」：あらかわ そおべえ・外来語辞典 東京 1983

「外来語辞典・東京堂」：楳垣実・増補外来語辞典 東京 1973

言語 14巻1号 大特集昭和語小辞典 東京(大修館) 1985

言語生活 401号 総特集戦後40年のくらしとことば 東京(筑摩書房) 1985

言語生活 280号(1975)以降

「現代用語」：現代用語の基礎知識 1984年版及び1985年版 東京(自由国民社)

広辞苑 第三版 東京 1983

国語大辞典 東京 (小学館) 1982

三省堂国語辞典 第三版 東京 1984

新聞のことは事典 1984 朝日新聞社編 東京 1983

独和大辞典 東京 (小学館) 1985

朝日新聞 1981年—1985年10月；朝日ジャーナル 1981年—1985年10月；安心(マキノ出版) 1985年1月号；暮しの手帖 43, 60, 61, 87号 東京 1976以降；「ザ・テレビ」ジョン(角川書店) 1985年1月—3月；壮快(マイヘルス社) 1985年5月号；図書(岩波書店) 1982年—1985年8月；年報(新聞月報社) 1977—81；へるめす(岩波書店) 1—3号, 1984, 85；未来(未来社) 220—223号, 1985；大岡信・詩への架橋・岩波新書 1980；岡田節人・試験管のなかの生命・岩波新書 1980；大沢一爽編・現代ドイツ人気質・東京 1979；小塩節・ブレンナー峠を越えて・東京 1984；柴田・されど われらが日々・文春文庫 1981；高野悦子・二十歳の原点・新潮文庫 1981；高橋健二・ヨーロッパ 詩とメルヒェンの旅 東京 1983；土屋祝郎・紅萌ゆる・岩波新書 1980；テンニエス・杉之原・ゲマインシャフトとゲゼルシャフト・岩波文庫 1983；プレイエ・河野・現代哲学入門・岩波新書 1976；増田四郎・大学でいかに学ぶか・講談社 1973

「石野・外来語」：石野博史・外来語の問題 岩波講座・日本語3・国語国字問題所収 東京 1977

「石野・現代」：石野博史・現代外来語考 東京 1983

「石綿・現代」：石綿敏雄・現代の語彙 講座・国語史3・語彙史所収 東京(大修館) 1971

「石綿・外国語」：日本語のなかの外国語 岩波新書 1985

市河-服部・世界言語概説 下巻 東京 1955, 200ページ以下

榎垣実・日本外来語の研究 東京 1963

川本茂雄・日本語と外国語の接触 岩波講座・日本語1・日本語と国語学所収 東京 1977

近代日本総合年表 第二版 東京(岩波書店) 1984

言語生活 366号 外来語の世界, 391号 外来語論争 東京(筑摩書房) 1982, 1984

国語学辞典 国語学会編 東京 1963

「新聞の語彙」：国立国語研究所・電子計算機による新聞の語彙調査(II) 東京 1971

佐藤喜代治編・現代の語彙 講座日本語の語彙7 東京(明治書院) 1982

鈴木重貞・ドイツ語をはじめた人々 言語12巻2号所収 東京(大修館) 1983

鈴木孝夫・語彙の構造 日本語講座4所収 東京(大修館) 1977

田中梅吉・日独文化交流史大年表 東京 1968

沼田次郎編・日本と西洋 東西文明の交流6 東京 1971

飛田良文編・英米外来語の世界 東京 1981

文化庁編・外来語「ことば」シリーズ4 東京 1981

松井利彦・漢語・外来語の性格と特色 講座日本語の語彙 2・日本語の語彙の特色所収 東京(明治書院) 1982

松岡 司・外来語の歴史 講座・日本語学4・語彙史所収 東京(明治書院) 1982

宮島他・岩波講座・日本語9・語彙と意味 東京 1977

森岡健二・日本人の外国語受容 講座・日本語学1・総論所収 東京(明治書院) 1982

矢崎源九郎・日本の外来語 岩波新書 東京 1970

Agricola u. a. : Die deutsche Sprache. 2 Bände. Leipzig 1969

Betz, Werner : Lehnwörter und Lehnprägungen im Vor- und Frühdeutschen. In : Maurer-Rupp : Deutsche Wortgeschichte. Bd. 1. Berlin 1974³

Bloomfield, Leonard : Language. London 1955⁴ 三宅-日野訳 東京 1962

- Brockhaus-Wahrig : Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden. Wiesbaden-Stuttgart 1980ff.
- Clyne, Michael G. : Sprachkontakt/Mehrsprachigkeit. In : LGL
- Duden Fremdwörterbuch. Duden Band 5. Mannheim-Wien-Zürich 1982⁴
- Duden : Das grosse Wörterbuch der deutschen Sprache. 6 Bände. Mannheim-Wien-Zürich 1976ff.
- Juhász, János : Interferenzlinguistik. In : LGL
- LGL=Lexikon der Germanistischen Linguistik. Tübingen 1980²
- Munske, Horst H. : Germanische Sprachen und deutsche Gesamtsprache. In : LGL
- Paul, Hermann : Prinzipien der Sprachgeschichte. Tübingen 1960⁶
- Paul-Betz : Deutsches Wörterbuch. Tübingen 1966⁵
- Rosenfeld, Hans-Friedrich : Klassische Sprache und deutsche Gesamtsprache. In : LGL
- Sapir, Edward : Language. New York 1949 (1921¹) 泉井訳 東京 1957
- Weinreich, Uriel : Languages in Contact. London-Paris-The Hague 1966⁴